

計の得票が稲嶺氏を上回ることがあれば、それは「辺野古容認」の民意の表れととられるという人もいる。しかし、名護市が市民に呼びかけて集めた市民の意見は2500件に上り、そのうちの99%が基地建設に反対の意見だった。11月22日から名護市臨時市議会が行なわれ、11月末には名護市の意見が知事に提出される。

*普天間ではオスプレイ配備反対、

高江ではヘリパッド建設反対、
粘り強い抵抗が続く

昨年10月と今年9月末までに、普天間飛行場に計24機が配備されたオスプレイ。昨年9月には普天間基地を3日間封鎖するという強い抵抗のなか配備されてしまったが、今でも大山ゲートや野嵩ゲートでは毎日「マリーンズ・ゴー・ホーム」と抗議が続いている。

高江ではヘリパッド建設が続行中で、住民は厳しい闘いを強いられている。国が抗議する市民を訴えるSLAP訴訟も起こされている。そんな中、高江を撮った三上智恵監督の「標的の村」が全国で上映され、マスコミが全く報道しない高江の状況が少しずつ全国に知られてきている。

辺野古の闘いは、始まってもう17年、2004年4月19日のボーリング調査を体感して止めてから、何と3495日目になる(11月12日現在)。4年前の建設反対の名護

市長の当選、沖縄県議会での全会一致での建設反対決議、9万人参加の県内移設反対の県民大会の開催、そして今年1月の41全市町村長と市町村議会の連名による県内移設の断念を求める建白書の提出と、沖縄県民は「オール沖縄」で反対してきた。そして沖縄だけでなく日本本土・アメリカ・世界中の多くの人の反対の声によって、ここまで基地建設を止めてきた。これからが正念場である。ヘリ基地反対協議会の安次富浩さんは「私たちがあきらめなければ変わっていきます。17年前に自民党も公明党も基地建設推進賛成だったのに、今は反対ですよ。しっかりと世論をつくっていかねば変わるわけですから。私はその意味で悲観はしません。ただ前進あるのみで

運動の現場から

受け継いだふるさとと上関原発

*「ハチの干潟」との出会い

20代の私たちに残された豊かな自然は、あとどれくらいあるのだろう。そして、どれだけの次の世代へ受け継げるだろう。私たちは、高度経済成長期に便利さと引き換えに失ってしまった本来の自然の豊かさを知らない。その事に興味を持ったのは、ある生き物との出会い

す。闘いをつくっていく。そのことによってしか現状変革はできません」(沖縄意見広告11月2日集会)と言っている。私たちもあきらめることなく、新基地建設、特に埋め立てに反対していこう。

辺野古への基地建設を許さない実行委員会が、11月末までの辺野古の埋め立てに抗議する緊急署名を集めている。県知事あて及び、防衛大臣あての署名には是非ご協力頂きたい。
http://www.jca.apc.org/HHK/NoNewBases/13NNB/11.9_2.pdf

(かとう・のりこ/辺野古への基地建設を許さない実行委員会)

岡田 和樹



いがありました。私が生まれ育った広島県三原市は瀬戸内海に面し、沖合には有竜島という小さな島があります。そこにはナメクジウオという生き物が生息し、減少してきてとても貴重であるという事を小学一年生の時に学校で聞かされていました。実物を見たのは、中学生の頃です。その島で潮干狩りをしていた時に、その小さな生き物が砂から飛び出し



てきたのです。実際に生きたナメクジウオに出会えた感動は今でも忘れられません。その感動は原動力となり、高校生の時に、科学研究部に入りナメクジウオを探して地元の海岸をしらみつぶしに回りました。そして「ハチの干潟」という干潟に出会ったのです。その干潟には、80年以上前にそこで撮られた白黒写真の風景とそのままの、手つかずともいえる自然が広がっていたのです。

*さしとめた干潟埋め立て計画

2005年12月、「ハチの干潟」で「藻場造成計画」という事業が持ち上がりました。その話を聞いた時、すぐに疑問が浮かびました。ハチの干潟にはもともと天然のアマモ場が広がっていたのです。そして、有竜島近辺では唯一ナメクジウオが生息している事を知っていました。

私は、計画が地元漁協で全会一致の可決をされた次の日から、干潟

に通い調査をはじめました。瀬戸内海の原因のようなその干潟は、美しい風景と共に様々な生き物にも出会わせてくれました。姿を消しつつある生き物もこの干潟には多数いることも分かりました。通えば通うほどに、この干潟のかけがえのなさが身に沁みてきました。また、「藻場造成計画」事業を調べると、そもそも藻場を植える作業はしないというところ、もともとあるアマモ場の上を埋め立てる形で、県内から排出された浚渫ヘドロを投棄し、ハチの干潟を壊してしまうということも分かりました。私は、何としてでもこの干潟を手つかずのまま受け継ぎたいと、地元を一軒一軒回って訴えました。また、干潟の観察会や写真展、勉強会など、地元の人にハチの干潟の大切さを知ってもらう取り組みをはじめました。最初は小さかった声も、次第に大きく広がっていききました。2007年3月、工事の手続きやアセスメントが進められる中、藻場造成反対の署名を開始。その署名はわずか1ヵ月の間で、市の人口の半数を上回り、直接市長や知事に想いを添えて手渡しました。地元の人たちと共に何度も陳情に行きました。当初は漁協の全会一致で可決した「藻場造成計画」でしたが、一人の漁師さんが干潟を守るために立ち上がりました。市議会では1票差でしたが、「藻場造成反対意見書」を可決。県知事も「これ以上海を汚してはならない」と意見し、最終的に計画は取り下げられました。そして、ハチの干潟には、

広大なアマモ場やナメクジウオが生息する干潟が残り、私たちがこの干潟を受け継ぐ事ができたのです。そしてその自然を手つかずのまま受け渡せるように、地元の人たちに支えられながら、ハチの干潟で子どもたちを中心とした観察会が続けています。

*原発の着工抗議に加わって

しかし、同じ頃、隣の山口県上関町で、上関原発計画による埋め立て工事が強行されようとしていました。これまで30年近く、上関原発計画は地元祝島の住民をはじめとした人たちが、いのちと生活を守るための懸命な行動によって着工されていませんでしたが、2008年県知事の埋め立て免許発行によって、工事が強行され始めました。2009年9月、海上に埋め立てのためのブイを設置する作業を阻むため、祝島の漁船30隻以上がもやいを張って、海上での抗議をはじめました。海上には祝島の漁船と並んで意思表示をする若者のカヤックの姿もありました。私もシーカヤックでの海上抗議行動に加わりました。上関に原発ができるということは、受け継いだハチの干潟にも影響があるでしょうし、もちろん私たちの生活にも直接影響があると考えたからです。

*「いのちをかけて闘いよる」

波しぶきを立てて接近してくる大きなクレーン台船や中国電力の警戒船に対して、祝

島の本造船が一步も引かず、海上に連なっている姿は、本当に勇ましく誇り高いものでした。海上で抗議する祝島のお母さんたちが言った「いのちをかけて闘いよる」という言葉にとっても重みがありました。海上は残された最後の抗議の場。その後も24時間交代での抗議行動が1ヵ月近く続けられました。しかし、工定期限の迫る中、中国電力はたくさんのお船を雇い、まだ日が昇らない明け方の海に、別の場所から運んできた9基のブイを設置し、工事着工を宣言したのでした。2011年2月、これまでにない程の強硬な作業がはじまりました。夜中の2時、600人以上の作業員が雇われて現地の海岸へ押し寄せてきました。現地には私たちは懐中電灯の明かりの中、阻止行動を続けました。祝島からも漁師さんやお母さんたちが駆け付け、騒然となりました。夜も明けるころには、中国電力の職員も大挙してやってきて、工事開始の宣言をしました。海上を見渡すと至るところから土砂を積んだ台船が海上保安庁の高速船に護衛されながら、迫っていました。祝島の早掛けの船が懸命に保安庁の高速船をかくぐりながら、台船を阻むため近づ



こうとしていました。しかし、保安庁の船が追いつき進路を阻み、取り囲みました。事もあるうか、祝島の漁船に体当たりをした保安庁の船もありました。私たちのカヤックも海上で拘束されました。台船や保安庁の船はあまりにも多く、ついには埋め立て予定地に入られ、先祖代々受け継ぎ、30年近く原発から「いのちの海」を守ってきた祝島の漁師さんの目の前で、海底に土砂を落としていったのです。その後も、何隻もの台船が土砂を投棄しました。私たちの行動は、いのちや生活を守るための行動。最後まで非暴力で切実な行動が続けられました。

その数日後、福島第一原発事故が起きまし

のら 運動から 現場 運現

経産省前テントひろばで

映画好きの私は79年の『チャイナ・シンドローム』(J・フォンダ主演)、83年の『シルクウッド』(M・ストリープ主演)の中で、事故を告発しようとするのを妨害する会社側の凄さから、放射能の怖さを改めて学習した。作家の水上勉さんの「私の在所(郷里の事)の若狭は原発立地になってしまった」と話した諦めと嘆きの声は今も耳に残っている。それから立地県の市民運動を応援するようにして来た。

た。そして今2年半が過ぎました。上関原発計画は白紙になるどころか、未だに手続きは進められ、拒否する漁師さんたちに漁業補償金を無理やり取らせようとしています。今なお祝島の住民をはじめ、多くの人がお金と権力で疲弊させられ闘いは続いているのです。一刻も早くこの新規立地の計画を白紙にしないでほしい。私たちの力は微力ですが、行動を続ける以上、必ずや本当の豊かさを取り戻し、大切なふるさとを受け継げるはず

(おかだ・かずき/1986年広島県三原市生まれ
瀬戸ふるさと農園・ハチの干潟調査隊代表・上関
原発阻止被団 写真も筆者)

谷 民子

今、福島の被災者を思うと、全くたまらない気持ちになる。少し想像力を働かせば、先祖代々暮らした土地を喪うことが年よりにとつてどんなに辛いことか。孫たちに遊びに来て貰えない。メディアは美談ばかり流すので忘れられてゆく。また、幼児を抱えて他所で暮らす若い母親の不安。地元に残った人との心の行き違いなどなど。書類やお金では頭れてこない胸塞がる思いを私は受け止めた。